



教員が研究の楽しさを語る

第227回(7/2)吉田 弘幸先生推薦

ブックガイド



※掲載されている本はL棟2階 あかりんアワーのコーナーに配架されます。

Book1

精神と物質：分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか

著者：立花隆, 利根川進著

出版：文藝春秋, 1990.7

コメント：1987年にノーベル生理学医学賞を単独受賞した利根川進への立花隆のインタビューをまとめた本。研究内容についての紹介もわかりやすく詳しいが、それ以上に、利根川さんがどのようにして研究者になったのか、研究の世界でどのように生きて(生き残って)きたのかがとても興味深い。



Book2

「ご冗談でしょう、ファインマンさん」：ノーベル賞物理学者の自伝

著者：リチャード・P.ファインマン著；大貫昌子訳

出版：岩波書店, 1986

コメント：ファインマンは20世紀を代表するアメリカの物理学者。自ら「他人がどう思うかは気にしない」というように、好奇心に忠実に自由に生きた人物のエピソード集。とにかく面白い。ほかにも同様のエッセイ多数あり。物理の教科書も個性的で面白い。





Book3

旅人：ある物理学者の回想 改版

著者：湯川秀樹 [著]

出版：角川学芸出版，角川グループパブリッシング(発売)，
2011.1 (角川文庫)

コメント：日本初のノーベル賞受賞者でもある湯川秀樹の幼少期から中間子を発見するまでの自伝。父親が商人にでもさせようかと思っていたのに学者になったとか、物理学の最先端であるドイツから遠く離れた昭和初期の日本で、どうして中間子の発見という信じられないような大発見ができたのかなど興味が尽きない。幼少時に四書五経から叩き込まれたという著者の日本語の文章はともかく美しい。

